中村俊定文庫
文庫 18
479

原題笠若葉会トアリ（字未）

喰花廊茶話 全

一日客あり世亨仙雪於只志夢すり古義といへる冊を懐になし夫其是非を問是を閲するに世亨仙を難して雪於只志とそ　又雪於只志を難して夢すり古義とな〻　何れも益なき論書にして評するに足らすといへとも客志きりに乞に應して評論すするにそ世亨仙に是非あれは雪おろしにも是非あり　好士其是を取て非を捨はいさゝか心練のたすりともなるんのと門友ニ三子と夜とすから茶話をなせハはや五

更の鐘字へつゝ塵尾を拂て面をわかる　于時
明和廿九のとし辰の秋八月於東都侶岳也

主人　隆花廊
客　千賀
仝　雨眺
仝　狄雲

MARUZEN

江戸世歌仙といへる集は往昔其角座話位座と
わかる時の集にして序に延堂世歌仙ハ芭蕉
翁の花なり　世世歌仙ハ延亭のとしの花にし
てなを定りの宴を結ふとあり、
○夢雑云　延宝世歌仙の頃ハ誹風いまた談林
風最中にて　丈せ翁も序と云し頃也、夫よ
り享子の冬　尾張五歌仙に淡林風の古躰を
破り春の日に光を和らけ瓢集あら野等には西
風を見ひらき吉来か猿蓑集において姿情定り

吉田文庫
日本俳文学会

ぬ　氏時をこそ芭蕉翁の花とも実とも中へけれ、延宝七歌仙を今世の詞花の花に用らるゝ事ゆかゝ意味有やしらすとあり

雁答云正しき本據あり、李嶋翁序に天和二年詞花の花の時とて春歌はせ林梅柳の発句を引古山夕の延宝七歌仙はせをの花なりとあるゆへに其文をそのまゝとりて書たれは聊し誤る事なしふかき意味有にあらすと答、

○貞云花といゝ弥美の詞にして延宝七歌仙は延宝の花也、其流を汲て晋流の判者其角度と定

MARUZEN

るハ延享の時を得此世哥仙を拵て席を建されは一部を賞して花と云　猫定りの実を結ふと書る文花いつを花の時いつを実の時とあなかちおし定る事にてハなし、一巻を賞しての詞なんを花実の時を論せん　又世歌仙といふ集は春来沽山いさゝかの事ありて席をわかつ夫まてハ其角派沽徳派淡林の判者も皆一例也、其度をわかつ耳の集にして世に押及すれ集にてハなし　是[参]概をしらすしてかたくなに雑する事にあらす、

ほとゝぎす蚊喰鳥又かゝこ鳥

天満橋　天神橋　や　雑波橋

石千鳥　猫貝鳥　すゝこ鳥

○夢雑記此集一部といふうち世人か独吟なれ
なれはいさゝかゆるすへきかなれ　ども　此集
編する時俳世歌仙をなゝへて差合の吟味なき
事ハ有まし　其時前後を揚合も正改すへき事
也、一部をよむ時耳にかゝり　不害を得るとあ
り、

○夢雑云此集一部といふうち世人か独吟なれ
はいさゝかゆるすへきかなれども　此集編する
時世歌仙をなゝへて差合の吟味なき事は有ま
し　其時前後を揚合も正改すへき事也、一部
をよむ時耳にかゝり快不害を得るとあり、

○庭答忘のり稿て当世の人の云時花する調は
せぬもの也、未練のこと也　其比多有けゝゆ
へ三吟同調有成へし　左のれも古調なきに
しあらすと芭蕉句ゝを引て答、

○貞云三子同調一人宛の歌仙自然の作也すゝ
て百吳百句に変化し、歌仙三十六句に変して

同句作を嫌ふ故に此句も変化の一脈にして同調も有へし、同調有とても一巻の中にこそ煩ふへけれ。一部と成ての論何を是を組せん、

盲昧の論なり、

○夢又雖云共風調ハ蕉門に拍子と云て一巻のつまりたる時能又ハ物あたき句の續たるを走らかす附かたも是ホをみたりにやられたるかよく一巻の拍子を定る時ハかやうに物の名三つ宛出すに及ハす

仙の拍子言法の拍子ありとて伊勢宗鑑三足猿の詮句を引て組す、

○雁答云 續五色碁越の句絶互敷仙同調ハ不吟味成へし 又三足猿の附合拍子翁の答にとひの附合を古歌取といひ、

是古歌を取に成す 歌書に歌を取るも

量字拾たを引て組まれ共

爰には皆合ぬ事也 又十五位七名八作を書出して蓮流に引合世歌仙附合四五ヶ所なりてい合すと雖す 蓮流其芭蕉の流ハ七名八作ホい者て取成る故ゆ夢其門と称して其言海を定す 若何者ゆ詳に答をらすへしと答

○貞云、是ホ雁か答ある こゝく其芭蕉の流七名

八撥を用ひず、是に伊勢美濃の邊にて初めて尊く便りに中臣祓に書写する也、七名八撥に自然と附合一巻の仙練にしれたる事也　貞観十八神鏡といへる附合の書あり　是い紙家に傳へて他に傳えさる書あり　又古歌取といふ甚誤れる事也　古歌取といへることばかくのごとく一巻の模様に句位ある事也、たとはしい

かさもしやと浦の夕風に

わくや　夏の　煙　一すし

歌枕せしい詠月まのまつ

まつらんと行　かひもなき雪

寒やと巨燵のうちに冬　竈

今はは又き障子より　紙

かやうに浦の夕風と言かけやくやとうけ末の

松まつらんと交冬もり今ハと交る　是うけ

てには　言ぜてにはといへるも前後の遠ひ

也鳶に鳶の附合ハせ五ゝ茶といふに

並の柵に鳶をなかめて

鳶の居る花の蹴れとありけり

是い古歌取にあらず　寄の前書と見て附句し
たる也　蓬の柵に蚤をなすめ住といふを前書
になし　花の陳瓦とよりけりと附たる也、是
はせを深川の庵にての附合也、むせる格あ
る事にして世に知ること多き傳あり　夏往翁
初めおのれし書もし季吟翁芭蕉に授布しに
や　傳はるへき書にあらず　予か家に傳り、
他に及すへき書にあらずといへとも好士のた
めさらに此俗に引て敢示す　ひ（にてしゞへちン）

昔徒夏往翁於吟花廊席あり

琴と笛とハいつれか勝れる

笛ハたゞすゞ琴ハ席風に越にたり

かく附句ありしよし　也　夏往翁十八秋録の中附合の一
拾也余略之

此書世に傳らず唯好士のために爰に記す

○庭巻云　其角か傳書ハ伊賀原伝に傳へ、尚
雪傳書ハ周牛夏雪夢太と相傳て雪中庵の号を
よし虚実也　原杖ハもとより其角の教子に
あらず　其子流景の中に　性　なるのみ
○夏云夢みしからの傳書を流言せんと　―て其
角ハ原杖に伝えしとの虚説をなす　予原杖ハ

くわしく知る名也　原はしと常陸国笠間の邑
飯田といへる所の庵にして仏髪の頃より東武
へ出秋門に入中年にして皇都一あもむく折か
ら三島の駅にして伝説を聞くもとより好む道と
いひ古哲の発句を口号て教示す傍に伊賀上
野の人ありて云　袖はかゝる街中にて伝説を
なす　方にはあらず、又渉猟の道にも専深
く同志侍れば予ハ伊賀の名也　是より五に
伴ふとあれば原伝とよし上野ハ芭蕉庵古園
といひ〻とより五郎小屋所とて共に彼地
に至り一つの庵をもふけて猩々庵と号し、専
ら誹諧を業とし正風論星月夜等の集あり、後
京師に出て卒す、角門といへとも角此更に専
ら傳ふることなし、

○雁山周作雪中の号を継ぎ　嵐雪一世の祢号
にして周作ハ半途にして業を変て医と成、吏
登号を祢す　夢又継て祢すと云　貞云雪中号
を雁か祢すと雁岩雄すれとも是は夢に限らす
古哲の名を継道を弘むるハいさゝか許すへき
か

世歌仙　第一巻　湖十

梅折ハおのれと動く月夜かな

はつ福光　素堂　きつの夫

大名の足軽の小鳥囀りて

○夢雄云只夜分にいたる光の宮くるまてにて、魂なしとて脇五躰を引脇ハ発句の景情を尋て一句に作をしとめすといハ雄化注し忘る所也

○貞云此発句周賀か折花林影動と有しにしひとしく暗香浮動月黄昏疎影横斜水清浅と林和靖か作にも景情おのつから通ハ月黄昏の晩眺

稲光のあしらひ何そ魂なしといわんは

○夢雄云第三ハ足軽の小鳥旭に鈴ありは之たる馬の勢也　前稲光の夜分に何處へ附たるやと雄す

○貞云稲光夕時分に大名の足軽馬に小鳥を附るものにあらす　小鳥は庭鳥文鳥などいへるをさし夜ひしらし差遣ると釣り役ありて附行事也、　又篭中の鳥旅中にハ夜鳴合もの也、是を一作とりて夜分に附し事昔折たる附也

又同巻中に

あつまかたを奥城の社まの秋

○蓼雖云　尾張にて禁句也　二条大政殿府等の勤番ハ厳重の所也　不忠不義也とこと（しく雖ず。

○雁答云　假令ハ武士の他城に通ふと禁因を破る衆大なれとも句の上に禁するを聞て、壮士の独逸不忠不義の衆を蒙る事迷惑千万なる〳〵と笑ふ。

○夏云　両説ともに予ハ用ひず　其一句ハ塞上の田の一畝也、あつまかたい東方なり何

ぞ雖ず〳〵す　日本記景行天皇二十五年日本武尊相模より上総に至らんとし玉小時、海中に暴風おこり市船あやうかりし時、尊の妾に弟橘姫といへる あり、尊たまらして是全く海神のたゝりなり、我おかわくい妾か身をもつて王命に贖んと海に飛入玉ふに風忽にやみ、船岸につく事を得玉ふ　夫より陸奥にくつり蝦夷を平ゲ　武蔵上野をめくり碓日坂にいたり玉ふ時尊碓日の嶺に登りて東方を眺て称し玉ひて吾嬬耶と是より山の東法ゑを号て吾嬬耶と

云也△又此句塞上の曲の一節
は吾嬬方也
といふは塞い紫(トリ)にして両方北方にて八塞といふ
ひ東南の方にてい撥(ハチ)といふ関所の名也、凡中
華の地と夷の地とわかるゝ所と蛾夷とわ
かるゝかこと
成南塞北狄とて廣き所西と北とい人の気の
強暴なる故に西戎北狄は常に軍を好む夷い志
つよく戾て中国の人の宴芸にあやぶみを感
秋に至り勝を打て古へ、ろく勝の折る合図に軍
勢を揃ひて其砦にもの入是によつて都よりも
秋に至ると事防の勢を塞迄へ差す事也、
その場防きの関所を建其関へ役に居る侍を
詩にも塞上塞下の曲といふ或は関山月胡笳の
曲なといも題す
さみい都をはなす夷さかい
に居て都の事を思ふ情彼東方在番城の夜半の
秋い婦妻の事なとおもふ情也。

明星と向ひ合たる蛙かな　後改定句　盤石

夕に巻目　艸の若葉も拾ふ蕗皆

○夢雑云氏勝心得す草の若葉蕗皆ハ陸の明星
にさし向ふたる時分に場のあしらひともいふ

べきか　結ふとハ何を結ひたるや　是初ハを
まとハす約らかり　や　草の葉のむすハるつき
ハ夏の野のいかにも茂りたる次成し　草の
若葉ハ出しよりいさゝか青みたるをいふし
○夏云　夢結ふとハ何を結ひたるやと　難す
結ふとハ事柳の糸の結はるゝ　なとハあらハせ
まつたく解結ぶ心に限らす掬するをも情水結
ふと云又交りを結ふ縁を結ふなとすへてした
しみ寄心を結ふもいふせ　是代発句明星と
さし向たる枝の蛙の晩眺のさませ也艸の若はも

夕くれハ露うかみてしたしみ寄すかたを云代
蛙枝とあらされハ若なり　脇も艸の若はと者
を結ひたるも　四りの也繁る草にし通す　さ
れハ第三二句の花也　かつてはたらすたる脇
也　笑ひさは難者の管見也、草を結ふといふ
事数多て万葉第一中皇女命紀の温泉にあも
むす結ふ時、君の歯母五代毛知所也繁代の岡
の草根手去来結と　手名其外勢法にも若草を人
の結いんなとあり、普の魏顆か杜面といへる
故
力人とたゝかふ忽然と一て走箒あらハ小原野

の草を結ふ壯田躍き倒るゝを頻歎たすまちか
らめ取たり、頻歎奇なる事に思しか其夜の夢
に彼老母顯れて云　我は武士か婦妾の親なり
我さか遺言する二事をその初たりへる君信
して我女を他に嫁さしめ命を全する事を得た
り是世ひとへに君か情によるたゝい　我甚恩
を報ため、事を結ひしとぞ　其外こと繁く略
す。

第三　和　推

第四差目　孝義

狼狽の遠山の月

松茸かあれハこそあれ松ふくり

○夢雑云　是等笑つへき事也、一句松茸の男
根に似たれい松ふくりしありていわ句作なる
へし　さなくハたゞひなしと雑す。

○雁云孝義か松茸の句ハ罪し報もなくと書り

○貞云此句にはて二三子にしめす事ありす
へて物には取捨あり男根ハ句に結ハれす單
丸といへはおかしきあり　平句にも結はるゝ
也、もし上達うへ知りて好しあらす。事

といひ辰といふにも差別あり　尾籠の事たゝ
ハ　尾籠にあらぬやうに仕立るか　手柄也
恋の部にしけやけき詞　我門かつて好まぬ事也
「あるハ時咤（シタヲ）抱は数ひ上達の上ハ格別申さぬ
事也　何程も深く其外物物等風流の艶詞多き
事何ぞ、　比ことき詞に限らん　予蜜蜜壁りの
折から宇津宮の辺みて金集の人〻問点取とて
もけやけき恵の詞ナさぬ事にやと言に答ふい
訓詁は連歌を本とし連歌の一所せ、席上聖像
を掛事なれハ昔神の前におりて濃上るに濃る

MARUZEN

〻句ハよし　是にて受恠有へしと言ふへりあ
御陽ハ外の事のやうにあもふ直俳多し　侍し
式も連歌を本とする事也

單丸に鶏冠の表る岳跡の冊　其角

辰をあるハする呂帽子直素　仝

此句の仕立にて心得有へし　上手の手段尾
籠なるをいかにし美しく仕立たる也

介古卷目　平砂

角力取とり揚はゝに廻り合

かたきのしれた望り大水

○夢雄氏大水罗之す　前句ハ角力取が我を
とり揚たる様と に廻り合たるといふ事成し
持て廻りたる作也夫に敵のしれた翌が大水と
いかゝ附たるやと雑す。

○貞云角力取のとり揚様ゝに行合たる句意分
明也　其相撲取敵ありと見て取揚様ゝの物語
にて知たるつし　さらはと思ひ立翌より故郷
ひもありたる有所大水にて其家なと押流し心
つくせし事無に成たる句意成し　大水とは
句中の変化にて面白く敵のしれた翌ゥ　大病　大変　乾白　大風

なとゝ此所楽し場也　其四つともにあしく大
水おかしやあり　戸一の作とたとハゝ夏きく
関の孫云めさ放し氏孫云の場楽し也、関の兼
定左云宗も　数多き中何となく　孫云浪路の走
りといひ一句珍しく　罗ゥ上午下午の手段ハ此
場にあることよくゝ　心使あるゝ

ゥ七巻目　光仲

若水のあたまくたゝゥ雪ゥ音
かなきゝの子も這廻る句

○夢雄云　此脇七十二候と遠やゝにていかに

文字にて写るもの存外けそて句とは手つい也
あまきりの子も這廻る也とて脚に成事有
つしと雖す、

○真云句とは手つい成とりつく句とは次に
ひとしく次と写るい前句の姿を定る習也、
次と写るを句と写る事かへつて面白又寡一直
して這廻る也とあり 是一句の詮といよこと
をしらす 句 一句の姿は句の一字にあり脚文字に
て写ること い何と心得たるそや 一句い詮を
言んなめも、と古抜の後置れ事的然也、
又予

三あしまつさいかなる事をなさるうん出ら
ん下手也と雖す、ひらうん句中予一の俳諧也、
なさるうと思したる一句の首也、

予八卷目　祇恕

鳥かけの花の中行牡丹哉

上手の建し所の莫

○夢云氏発句ハ一部の秀逸成一　尤花の中
行と言取大物を定せたる手たれと賞す、
○真云此句秀逸にあらす　狗工にて一句の佳作
にあらす　湖十巻頃の抜逸にまさる其外の発

句一句のあたらしみあるゆゑ梅折へいろこく月
麦のさま大文字焼石の火もひろき遠山の
初鶯又鶯の女の切火にきよく聲何すれた麦作
の手つよき一作石川のほとをきさめて飛ぶわ
ほたるし涼しく人ひとり直らて孤丁の影行水
は淋しみあり　見ひあぬ人の日ころもあしろ
字のすがたに叶ふ鳥のはけの句ハ句中の細工也
二三子此所に心を住し、たとハ、木を伐て
投出したる作ハ下手のなりぬもの也。　小刀細
工の句は何程も多し　地蔵と下り細工の工如し

○寒雑云ハ脇発句と遷ヒ文字前に用ひしと雑
す。
○夏云此脇わきの孤ろすしといつも栖は夏
をたゆとすつし　麦の字脇字に工案せしか
　　夏九巻目
　　冥明
　　物喪し五月ハ雨をかつけつゝ
○夢雑云上つ句つゝ為ものつきものなり。
存義が花とのみ孫彦玄孫並花つゝ為ら、
冥明が句雨をあつきけりと有たく孫彦玄孫ら
ら詠とか並花さセとか有たしとゝ

○貞云下の句のつゝけハ習多し東式にも一つの手爾葉也上の句のつゝけハいさゝかの習ひ也、すへて平句爲にけり也哉なと、留し句ハ此句のうつり流路あしく條へハ爲の句の手爾ハ下の句へうつりよりやうにいたす事一句のたしなミ也、此習ひハ傳にして外に一書ありありやうの詮義なけれハさちらかに書示すしのせ、つゝハ下の句へ流路のうつり結びもの也、てにハなとの習ハ下へ條よきもの也、

第十巻目

おもひ出て氣の改るところゝけ

胴人形の出ろし　と云

○嫁難云何ゆて附めうしにも此胴人形ハあまり横ハぬ附と難す、

○貞云此句何に寄たりや計がたし　附込て一句立とする事あり　古往昔十八神餘と云へる傳書に委敷あり　寸木ともに此傳甚附にくあり
くり是の如く難する　に當るなるか

第十一巻目

佐見なる喧嘩喧しに又喧嘩

MARUZEN

ラ矢八幡山の石処

○夢雄云出羽蕉門戸一嫌あせと云

○真云一巻の夏歌にしてくるしまぬ附也、

喧嘩といふに俗云ラ矢八幡とあって石処と一句の詮を是亦古歌取たるすがたをあくへてしさいが雄す事也

坂田の喧嘩はや昔なる夏衣関の孫云板は布是と喧嘩と有に刀とはる事ゑるさきはせ、さんも一句の詮ある句にて故人し其俗に布し也、前に云蕉の冊に鳥を詠てとあるを幸の前書と見て真の附琴

と笛と問巻の附多田にやくやと古歌のきせてには我い故ゑ古流紙流をとり男ゑる板あきにあす詮の多ゆい嫌ふ事也、

廿三巻目

鳴時に男鹿は角をおつけり

○夢雄云此文句切字あって句すせけりの歌ハ切字といふ名目にもたれて切字の意理をしゑと雄す

○真云此一句けりにてきれすとよいあるゆへをもって雄す心得かたし発句けり留ハ

習ひあり夢比羽れ見れる所多ゆい紙す
事ありし　出源傳にして夏に隠しつ

廿四巻目

言つと下の男を誘引出し

死ハともにと膝をかゝえて

帳子あかつき寒くまもり

○夢紙云氏三句の内たり打絶しの誘引出た
る人より帳子まて一領たりと紙す

○俗答云時候降物たとにて三句を特する小未
練の問也古集を味之無窮の豚鈍上上の仕業を

知致すし　特る小目然に特すをしつて感
無とす事を彩物を走る時は特も又特にあ
と答す

○真云俗が言ること三句内たりを煽ひて人
情三句にわたる降物の数にて特する伊勢
美恨の遺にて事とす、是和学を書くるの也、
巧達の上い広の数りに極る事にあす人情
三句わたるとゝよとも真人情に特ちすく
て変は三句より三句迄つゝく是にて考る
一一　加初学い三句に三句つゝきたる程

の初めて二句ともうるさく一巧遠の上に三句四句つゞきて一句の仕立恋のうたにも特あり

りてうるさくかゝりすぎ　若松の句三句まで五句もありといへるまでも心得也其意趣は初五の句はさといい思髪を結ぶも伊達に流の[illegible]なと

い一句五句つゝくりすぎて道具多詞多よつて二句ともうるさくとゞゆ　三句のわたりまで心得也、此三句わたるやうたりとも一句わかりてわたる意趣に非ず　惟子のまゝ上りたる

と夜数脈を以特すむ事人ありといへども人情

の一特ありて何を新ずる事有へし

第十六巻目　紀逸

風ひかぬ人の日ころや細代守

○夢雑云此句うこきて変句にならす。風ひかぬ人の日ころや宗倉仲　飾たゝき夜魚引とも成へしと雑す

○貞云甚あたらす片鄙の何もしらぬ人を導んにはかゝる雑を云て自を建人とすると誰とかある者もあらし　是一句を特（是定むへし

寒念仏に風ひかぬといふ情やあるへき　寒中

の勤彼雪中に脛もかへさの数ひなんを凡ひか
ぬなと柔弱のいあらん細代宇のすがたは業也
寒念佛鉢たゝさハ勤之勤業の二つをわかたす
して雑する事中〳〵の善悪ハわからす世をわ
たる業と勤行とハ遠ふ也、然〳〵考へ一夜熟
引し世渡る業なれとも彼は狩する猛勇の強剛
なる姿情也、又細代宇は柔弱の姿情にてさら
に動く事なし、然くけく句也、

業　細代宇

業たした猛勇の強暴
夜熟
引

夜無引ハ西西ニテ狸マミノ
数ヲ狩ニ一山ト云ニ大六疋連し
ニ山ト云ニ大十二疋連テ狩ヲス
猛勇也

凡ひかぬ人の日ぐらや　勤行　弥さゝみ
同　寒念仏

月の格に帰る花鳥

○夢雑云月花は一巻の陰陽にして故人も定座
をなし置る深き意味あり　然るを斯短句に月
も花も結ひ捨る事あらハ除物やといはぬ中の
仕方也、但短句に月花の結ひたる自慢なるや
あもしろかゝる事也と雑す、

○夏云月花に定座といふ事古式には投句月花を結ぶ事一巻の模様にしてとかむるにはあらず多く歩集路通が短句の月花を結ひ一句いわにや

蕎大根に低い水際

輪違ひい素人かましく思ハれて

○夢雄云此句宜之す何とて輪違か素人かましく見へるか会点ゆゑなると雑す

○夏云氏一句ハ第三の孤立すし輪違は一句分明也、古風にて素人ましきもの也との意成

一し、寥蕎丈の流行に走て不易を忘ずさといへ共流行の句にもあらず是を雑せハ第三の孤立すくして平句なるべ

世敦仙も雑すハ雑する句あるといへ共不易を顕す所にして李白酔中の絶章し甚大量によつて也、杜子が夜引のつゞて工業すたるやすちハなれとも白が白髪三千丈のこと き大量の佳作ハあれ いつも同し場に工業の長るものハ佳境に至りあたくしとする絶章ハなきものなり、すくて雑すハ雑する事あ

り、或人の茶話に蕉堂の名鳥と雑すれハ雑あり世てハ大きちつきより夜更若かきて聞て止ハ書說わけて保ちハ水世界の泛まて聞て音を入るハ長吟也と云りつ小ハさる雑あり

附録　山吹論

蕉門芭蕉庵の句多き中古池の句俳ある句なとい云或ハ三世のいをこめしなを中

又此句初ハ山吹やと上五文字を置後果古池やと有りしを云又ハ初より古池の句を其角に定せ王ハ其角ハ山吹やと五文字を置侍なりとい云に拙者の云古池ハ我歌也、山吹ハ汝が歌也、とある集にも悪しく書いかにやと問答云ふ大なる虚說也、先世上に俳諧の奥独の或人ハあなと思ふハ此句の意いまたわからさるゆへにさまゝ旨說をなす　柳古池の句ハ寂寥の一脈也、俳しこれ上もあらしとすかたを調ハ、又又すして欲家の句也其庵ちか

き古池に音あるハ蛙也と音の字則字眼也句魂也、志あるを款冬やと五文字を選て足るへしさすれハ眼前の句と成眼前の句に蛙の飛入し音はしれたる音也、又音の字無益に成一句の句の詮しあき句と成又すして観視著すれ音の一字蕚しみ上し成らし　各くらゝより成人の句を書ちんそしてめくってふ巧の作とあて熟ひ多し是ホい一句のうへまてたいちにしれたる事也、

秋風論

又問嵐雪一代の句ハ秋風の句也と言傳ふ、其角もけ句をうゝやゝ陰を感する懐のゆと案しつれとも此秋風の句に及し也　其角物うゝりもしと素云ハかるゆ

蕉翁ハ一代の句とは申かさし　けー句世人見出さる所也　是い風情の論といふより出たる句也　其意趣ハ六祖の弟子二人真隆寺においての論也　寺前に建置さる情の風来てろこ

かすを見て一僧の曰情のうごくや　風のうごくや　一僧の曰風の動くせ、答一僧の曰風の動くにあらず情の動くせと論す、時に六祖帰り合せて二僧ハ何を論するやと問に此よしを論すと答　六祖曰いつれも高論成といへども いまゝ是らいるせ、是情の動くにあらず　風の動くにあらす、各心の動くせとしめしぬ是以心のうごくより出さるなり　又昔往定軟公任に問玉ふは今菱式部和泉式ア といいつれか増れる歌よみにやと　問玉ふ　答玉わにいつれも　わかちかたしと宣ふに　定軟公ハ十分に菱式ア成つしとのゝあもいれわさと問玉わに忍ひのみなる答にあかりけれハ再ひ問玉ふに菱式ア かくらゝよりくらゝ迄入ると有しは名歌なりすや　せもつて是を書す和泉式ア かゝに申かいる詠あつやと問玉わに公任公答玉ふハくらゝよりくらゝ迄とは法花経の文也是よりあたらゝ天下の句はるかにてらしせ山のはの月とあつ、菱式ア かちかゝをつゝの奇ハ出ハ和泉式ア つの思ふにこやとへ

のつおへさるひとてなれあしの八をふき
といふる事ハ今ハ[illegible]の音物ゆゑとるかに
おくし無意味と定おに定れ[illegible]ようあり感じ玉
ひめとなり是ホのこと〳〵書より出たる句ハ
骨折なしよりて一代の句とハ申かたし

MARUZEN

青梅論

昔往桃青深川の庵にて折しもさつきの頃風
はげしく閑窓に青梅のふることく夢を驚す無
して青梅ハ風の禍やと吟詠するに下五文字な
く黙沈吟なせしに甚角か聲として青梅は風の禍
やさつき闇といふ五文字をうつゝのことくに
聞ゆ戸外に出て見るにかつて人なし是全く心
をもつて神に通ずる所也　強起か曲終て人ふ

えと吟詠なし結句なく半夜鼓をひねるに虚空
に聲あつて江上数峯青と一句を得しも是にい
としく言外の餘音人たえて残る山このこ立そ
ひえし意中に及かたき結句と人賞す又上五文
字の楽しあき句あり下五文字のあき句あり、
たとハゝ

さみ〳〵れハ風の礫や　下五文字なし

上五文字なし　淺蕎の汁や夜蛾

右是にて意尽〳〵何も未熟の業一也、

夜蛾の句ハ昔往超波かある庵において見るの

句也、しかるに上五文字に置かねて暫沈吟し
京にあきの五文字を得たり出五文字中く不
巧の及所にあらすさつきやゝこの五文字すも
京にあきの五文字増って感あらすくて下文字お
き句ハ楽し有もの也上五文字おき句ハ楽しお
きゝの也、名人の手段可仰可貴超波甚席にて
物かたりに今世の詞字句業するに只安しと工
業す　予ハ一句業すれハ五脱稿復すとゝて頭
上より行燈のごとく立つほるとゝ　すれハ出
度において一句とゝて佳なりさるハなくわけ

てさみたれやせめてあかるき傘の内の一句せめてのこゝろなぐさめしむべし　女史不幸にして壮年に身まかりぬ今存在せる前人口を閉へき事也。

MARUZEN

頼春退筆氏筆より写之
昭和九年十月八日校合了